



TITLE:

佐々木君を思ふ

AUTHOR(S):

木村, 榮

CITATION:

木村, 榮. 佐々木君を思ふ. 天界 1921, 1(9): 159-160

ISSUE DATE:

1921-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159594>

RIGHT:

佐々木君を思ふ

緯度觀測所長
理學博士

木村 榮

私の始めて佐々木君を知つたのは、師範學校卒業後一年立つた立たぬ内と思ふ。其時は水澤觀測所官舎の私を尋ねて來られたが、山本一清君が丁度當所に居られる時で在つて、其頃來られし時は、私の處よりも山本君の宅に永く居られて、色々天文に關する智識を得られ、同時に山本君に佐々木君の學術に熱心なる事を認められ、只佐々木君を田舎の小學校先生に埋めて置く事が如何にも惜しいと思はしめたが不幸健康の許さぬ爲めと、又縣に對し義務のある爲め、其儘になつて居つたが、山本君も其後當所に於ける仕事一先づ完了せしため、歸洛せられた。其後年に二回位づゝ私の宅へ來られ、色々熱心に天文學の質問をされ歸られた。又内では自分で望遠鏡玉を拵へ、手製の望遠鏡を作り、又時を測定する小子午儀をも手製にて作り、タイムの觀測をなす等、獨創的の仕事なせり。後にバーンベスチムング杯の

本を私より借りて勉強せられ、折々質問の爲め來水せられた。其爲め普通實地天文學は勿論、多少の理論天文學も獨學にて理解せらるに至つた。

君が學問研究に熱心なる而已ならず、又身體の薄弱なるを治せんと非常に勉められた。君は師範在學中より多少病にかゝり居れるが、何とかして是れを治せんと考へられた。併し元來君の性質上只普通の服藥杯を用ゐず、精神療法を兼ねて行はんと斷行し、朝起冷水摩擦等は勿論、彼れが故郷より程遠からざる高田の海邊に、丁度褌の熱心家（醫師）あるを幸ひ、同氏の熱心なる信者となり、毎年夏冬の二回、常に褌を行ひ、其爲め一時非常に身體恢復し、食欲も前に比し倍位となり、風も殆ど引かざる有様になり、大に褌の効能あることを信じ、又他人にも宣傳し居られ、私の長男の同じく身體薄弱なるを聞き大に褌を勸説し、或夏親切に高田に案内せられたが、不幸に一兩日を経て長男腸加答兒に罹り其意を達せず、却て同君を煩はして遙々仙臺の宅に送られし等親切を極められた。

かくの如くにして、同君は身體餘程に健全になら

れたれば、一先郷里より餘り遠からざる學校に奉職し、殆んど一ケ年間無缺席の證明を得て大いに意を強ふして居られた。其内新城教授及山本助教の好意により、京都大學に雇ふ事となり、其の決定的通知を受けたる時は、天にも昇りたる愉快を感じ居られた。是れ、同君の學術研究大家の側に行かるゝ事の、如何に楽しく又自分の多年の希望を達し得たるが爲なるべし。大學へ入りて以來の消息の詳細は私の知らざる處なるも、短日月の間幸ひ佐々木彗星の名をなさしめたるは、偏に神の同君の熱心を憐み賜ひし爲なるべし。

君又た畫を能くし、極めて器用なり。是れ學校にてならひしならんも、亦天才なりと思ふ。

要するに、君は熱心なる研究家なる而已ならず、又體育訓練精神修養の爲め大に奮勵せられた。其結果、彼れは當世稀れに見る人格家で、人に對する極めて親切、長者を敬ひ、幼者を助け、人の恩を忘れず、人を謗らず。私も君と交り、大に此點に於ても感服せり。元來君は交際家に非らざれば多くの友達は無き様だつたが、其の友たる皆親友の様なりし。彼は只學德の篤き人と好んで交るを欲し、常に之を求めたり。只天彼に藉すに今數十年を以てせば、彼自身に於ても、又學術界に於ても、満足なる好成绩を齎せしならん。惜哉、悲哉、嗚呼。

佐々木君の想ひ出

理學士 百濟教猷

大正七年の秋頃、鷲座の新星の目測光度に就き未知の人の觀測も整約して居た。其時其人の名を知らないで「Tegami no Hito」の分として觀測手帖に書きとめて置いたことがある。其「手紙の人」は即ち佐々木君であつた。其頃佐々木君は郷里の家であの新星を眺めて居られたのである。

翌年五月京都へ來られることになつて十六日の朝大學の星學研究室で始めて挨拶をした。丁度太面に肉眼で見ゆる位の大きな黒點が現はれて居た時で縁の草原に立て黒點は見えますかと話をしたことを覺えて居る。

天文と機關車とは大好きな私は佐々木君とも其方面から心安くなつて來た。其頃は日曜祭日でもかまはず研究室に行つて居たので、終ひには天文臺の三人が毎日顔を合はさぬことは無い位であつた。

佐々木君は器用な質の人であつた、懷中時計の細かい器械を分解し掃除して半日位費されることも尠